

No. J2105 内地日本における、満州人女学生の教育の研究 ― 佐賀県高雄市の留学生向けの女学校如蘭塾を例に
筑波大学 特任研究員 梅原 優
本研究は、国内外の資料収集と分析を通じて、十五年戦争中の日本における女学校という認識の枠組みが、国家の要請する銃後の女学生イデオロギーを裏切り、労働力として回収されることを拒絶する抵抗力を保持していたことを解明する試みである。佐賀県武雄市に 2 年間存在した、ユニークな女学校「如蘭塾」の文化的活動を検証することで、日本の十五年戦争下における女学生像に関する伝統的な理解を修正することを目的とする。 先行研究（今田絵里香(1999)、本田和子(1990)、川村邦光(1992)など）は、近代日本における少女・女学生性の概念について、近代に発生した女学校という良妻賢母を作るための教育機関と、女学校に通う女学生向けの少女雑誌の重要性を指摘してきた。雑誌は最初期こそ、良妻賢母的な教育の延長上に教育の補助として発生したはずであったものの、読者と編集者の共謀によって、家父長制から距離を置いた想像上の少女の共同体が出現したことは先行研究が共通して示してきたことである。そして、この想像上の少女の共同体は、ときに必ずしも良妻賢母につながらないような少女・女学生像までも否定しない特質を持った。しかしながら、雑誌や教科書を研究の分析材料と置く伝統的な少女・女学生らしさの伝統的な研究方法は、十五年戦争下における、女学生概念の検証を難しくする。戦争の進行に伴い、国策と検閲の影響下でバラエティに溢れた少女雑誌群が次々と物資の不足や検閲が通らずに廃刊に追い込まれ、国家のイデオロギーを色濃くうつした戦争に協力する少女像自体を称揚する雑誌のみが生き残ったためである。明治後期から昭和初期にかけて発展してきた、国家のイデオロギーに加担しない女学生像は次第に衰退し、従順に国家に奉仕する銃後の少女・女学生像に収束していく。 本研究では、国家主義に収斂する従来 of 女学生像のナラティブを超え、戦時下においても女学生の概念が多様であったことを明らかにするため、制服（衣服）と学校建築（住まい・学習の場）を分析対象とした。国内の施設（国会図書館、東京都立図書館、佐賀での清香奨学会の訪問と関係者のインタビュー、伊万里市立図書館、武雄市立図書館、(株) ケーブルワン）での資料収集、国外の施設（コロンビア大学エイブリーアーカイブ、ニューヨーク市立図書館）での資料収集を通して、如蘭塾の生徒に支給された制服が、日本の女学生を労働者として動員する時代の中で、労働者とは異なる存在として浮かび上がらせることを可能にし、かつ女学生をパフォーマティブなものとして再定義したこと、およびアメリカの建築家フランク・ロイド・ライトの多大な影響を受けた遠藤新が設計した校舎は、戦時下における日本の女性教育という塾の本来の目的に必ずしも与しない建築スタイルを持つものであると解釈できることを明らかにした。この研究は、十五年戦争中の女学生に関する研究に新たな視点を提供するものである。